

虫垂切除は潰瘍性大腸炎を防ぐ

Appendectomy protects against ulcerative colitis: Rutgeerts P, et al (Gastroenterology 106: 1251-1253, 1994)

喫煙は潰瘍性大腸炎の病態に関与する1つのfactor(禁煙者では発生率が高い)であることが知られている。今回虫垂切除が潰瘍性大腸炎の病態に関与する1つのfactorとなりうるか否かの検討を行った。対象は潰瘍性大腸炎グループ174例(全結腸型32%, 左半結腸型68%), コ

ントロールグループ161例であった。発症前に虫垂切除を受けたものは前者では0.6%, 後者では25.4%であり, 虫垂を切除していない群では切除群と比較して有意に潰瘍性大腸炎の発生が高値を示した。2つのパラメーターである虫垂非切除と喫煙は潰瘍性大腸炎の発病に密接な関係があった。

虫垂切除が潰瘍性大腸炎の発生を抑える機序としては免疫系の関与が示唆される。虫垂は, パイエル板と並んで腸管の重要なリンパ組織であり, B cell が主に, T cell では hel-

per T cell が主に占められており, helper organ としての役割を占めている。虫垂切除を行うことにより helper と suppressor 機能のバランスが崩れ, suppressor T cell 優位となり, 潰瘍性大腸炎の発生を抑えると考えられる。

結論として完全な虫垂の存在するものは潰瘍性大腸炎の risk factor となりえ, 虫垂切除は潰瘍性大腸炎の発病を防ぐと考えられる。

(愛知県がんセンター消化器内科

新田 康夫 抄)

Crohn 病に対する抗結核療法—多剤併用二重盲検試験

Antimycobacterial therapy in Crohn's disease: Results of a controlled, double blind trial with a multiple antiple antibiotic regimen: Prantera C, Kohn A, Mangiarotti R, et al (Am J Gastroenterol 89: 513-518, 1994)

Crohn 病の発症と抗酸菌との因果関係についての報告は少ない。これまでにも, 抗結核薬が Crohn 病に治療効果を発揮した例がある。しかし, 比較試験は極めて

少なく, rifampicin, ethambutol について行われた結果は negative study であった。化学療法に抵抗性の非定型抗酸菌の関与の可能性を示唆する報告もある。そこで著者らは, 強力多剤併用の抗結核療法を Crohn 病に試みた。

対象は steroid 治療中の40例の Crohn 病患者で, 二重盲検法で抗結核治療群と placebo 群に分けて比較した。steroid は2か月間で漸減中止した。抗結核剤は9か月間継続した。抗結核剤は rifampicin, ethambutol, clofazimine および dapsone (後者2剤は本邦では未使

用剤)の4剤併用法であった。その結果, 抗結核剤の副作用で2例脱落したが, 緩解維持率は抗結核薬使用群で有意に高く, また placebo 群で緩解不可の9症例は cross over 例として抗結核薬に変更し, 5例までが緩解した。

以上, 本研究は4剤併用の強力抗結核療法は Crohn 病の緩解維持および症状の軽減に有効であると結論している。

(愛知県がんセンター消化器内科

白井 正人 抄)